

# 日本語学習におけるナ行音・ラ行音の聴取混同

## —香港広東語母語話者を対象として—

大久保 雅子

### 要旨

本研究の目的は広東語母語話者の日本語学習におけるナ行音とラ行音の聴取混同傾向を明らかにすることである。

後続母音・特殊拍などの音環境が聴取混同に与える影響を明らかにするために、広東語を母語とする香港人日本語学習者を対象に調査を行った。その結果、広東語母語話者のナ行音とラ行音の聴取混同は、音環境によって傾向が異なることが明らかになった。また、個人要因による影響を探るため、アンケート調査を行った。その結果、聴取混同が多く見られる学習者に混同に対する意識がなく、まずは学習者自身が混同を意識化する必要性が示唆された。教師が学生の意識化を促すために、教師はナ行音、ラ行音を含む新出単語導入時に学習者がナ行音とラ行音の聞き分けができていのかどうかを確認していくことが必要である。

### キーワード

広東語母語話者 ナ行音とラ行音 聴取混同 母語干渉 混同の意識化

## 1. はじめに

広東語母語話者が日本語学習においてナ行音とラ行音を混同する傾向にあることは、日本語教育現場で広く認知されているが、ナ行音・ラ行音の混同のような音韻レベルの混同は、日本語によるコミュニケーションに大きな支障をきたす。例えば、実際に広東語母語話者が「はな(鼻)」と「はら(腹)」、「しらない(知らない)」と「しなない(死なない)」、「ドアをロックする」と「ドアをノックする」を混同してしまう。しかしこの混同に関する先行研究は非常に数が少なく、聴取面における研究は管見の及ぶ限り見当たらない。

中国方言には /n/ と /l/ の弁別がある方言とない方言があるが、広東語は /n/ と /l/ の弁別がある方言に分類される。しかし現代広東語においては、/n/ と /l/ の弁別が消失しているという指摘が数多くされており、/n/ は /l/ に移行したという指摘(麦 2007、張 2007)が一般的である。

一方日本語のラ行音は、弾き音で発音されるだけでなく、語頭や撥音の後のラ行音は [l] で発音されることが多いため（天沼他 1982）、日本語学習者にとって習得が難しい音とされている。特に広東語話者の場合、母語に弾き音がないため、日本語のラ行音を母語の /l/ で代用するという指摘がある（Lai 2001）。

広東語話者がナ行音とラ行音を聴取混同するのは、/n/ が /l/ へ移行した母語の影響が考えられ、ラ行音からナ行音に誤聴するのではなく、ナ行音をラ行音に誤聴する傾向が強く見られることが予測される。そこで、広東語母語話者のナ行音とラ行音の誤聴傾向の実態を明らかにし、日本語教育現場でどのような音声指導が可能なのかを検討する必要がある。

## 2. 先行研究

ここでは、広東語母語話者のナ行音とラ行音の生成面に関する先行研究について述べる。この問題に関する先行研究は野沢（1980）と李・村島（2002, 2003）しか見当たらない。

野沢（1980）はナ行音について、広東語の [n] が [l] と自由変異の関係にあることがそのまま日本語の [n] にもあてはめられ、日本語 [n] が広東語 [l] に混同される誤りが数多く見られることを指摘している。またラ行音に関しても、/r/ 音は /n/ 音に混用されることが多いことを指摘しており、この混用はすべて語中に現れ、舌の緊張度を欠くと /r/ が /n/ になると述べている。

李・村島（2002）は、香港の大学で日本語を学ぶ 67 名を対象に、生成調査を行っている。その結果、/n/ と /r/ では誤用率に差がなく、語中位置（語頭・語中）でも差が見られなかった。先行する音が「短母音＋鼻音」および「二重母音」の時、/r/ は [n] になりやすく、後続する音が「短母音＋促音」で、かつ先行する音が「短母音」の時、/n/ は [r] もしくは [l] になりやすいことを示した。また、李・村島（2003）は、香港広東語母語話者のナ行音・ラ行音の混同において、/n/ ⇒ /r/ になりやすいか、それとも /r/ ⇒ /n/ になりやすいかは、話し手によって違うことを指摘している。

以上の研究から、生成面に関しても見解の相違があることがわかるが、聴取面における先行研究は管見の及ぶ限り見当たらず、生成上の問題点と聴取上の問題点が一致するかどうかは明らかになっていない。

## 3. 本研究の目的

本研究の目的は以下の二つである。

- ① 広東語母語話者のナ行音・ラ行音の聴取における混同の傾向を明らかにする。また、広東語母語話者のナ行音・ラ行音の聴取における混同が、音環境の影響を受けるかどうかを明らかにする。もし、影響を受けるとすれば、李・村島（2002）の生成混同傾向と本調査の聴取混同傾向との共通点・相違点を明らかにする。
- ② 学習者の発音・聴取に関する意識とナ行音・ラ行音の聴取混同との関連を明らかにする。

## 4. 調 査

本研究では、目的達成のために以下の調査を実施した。

生成面においては、音環境によるナ行音・ラ行音の混同傾向が明らかになっている(李・村島 2002)。本研究では、聴取においても生成と同様の混同傾向が見られるのかどうかを明らかにするために、李・村島(2002)の生成調査方法を聴取調査に応用し、ナ行音・ラ行音聴取調査を行った(調査Ⅰ)。調査協力者は以下の144名である。なお、この144名は全員広東語を母語とする日本語学習者である。

- ・A 大学専業進修学院の日本語専攻の学生 110 名  
(1年生:54名、2年生:46名、3年生:10名)
- ・B 日本語学校の学生 34 名  
(初級:7名、初級後半:12名、中級前半:5名、中級後半:8名、上級:2名)

また、学習者の発音・聴取に関する意識がナ行音・ラ行音の聴取混同に与える影響を調べるために、アンケート調査(調査Ⅱ)を行った。

### 4-1 ナ行音・ラ行音聴取調査(調査Ⅰ)

#### 4-1-1 調査内容および調査方法

本調査は、広東語母語話者のナ行音・ラ行音の聴取における混同が、後続母音・特殊拍などの音環境の違いでどのような現れ方をするかを明らかにするものである。調査語は無意味語を使用し、語頭・語中の音環境(短母音・長母音・二連母音・撥音・促音)の中に現れるナ行音・ラ行音のミニマル・ペアの形になっているものである(表1)。なお、李・村島(2002)の生成調査の結果と比較するために、先行研究で使用した調査語を聴取用に応用したものを本聴取調査に使用することにした。

前述の調査語82語にダミー語20語(マ行、パ行のミニマル・ペアの形になっているもの)を加えた無意味語をキャリアセンテンス「商品名は( )です。」に入れた102文を東京方言話者が読み上げ、ランダムに並び替えたものを聴取調査の問題文とした。録音にはRoland EDIROLレコーダー(R-09HR)を使用し、防音室にて録音した。また、録音した音声は音声分析ソフトSUGI Speech Analyzerで音声波形を確認し、前に1000ms、後に3000msのポーズを挿入し、wav.ファイルを作成した(サンプリング周波数44100HZ、サンプリングビット数16)。また、それぞれのファイルの前にBeep音(300ms、79.76dB)を挿入した。

調査方法は聞こえた刺激音がナ行音かラ行音かを選ぶ選択問題による一斉調査である。選択肢は三択にし、ナ行音、ラ行音のミニマル・ペアの形になっている語の他に、どちらからわからなかった時のための「NA」の選択肢を設けた(例:ナカ ラカ NA)。なお、作成した問題は日本語母語話者2名(東京方言話者)が100%正しく聴取できたものである。

#### 4-1-2 調査結果および考察

子音別の誤答率は、ナ行音の誤答率が20.88%、ラ行音の誤答率が24.36%であった。

表1 調査語リスト

語 頭	短母音	なか	にか	ぬか	ねか	のか
		らか	りか	るか	れか	ろか
	長母音	なーか	にーか	ぬーか	ねーか	のーか
		らーか	りーか	るーか	れーか	ろーか
	二連母音	ないか				
		らいか				
	短母音+撥音	なんか	にんか	ぬんか	ねんか	のんか
		らんか	りんか	るんか	れんか	ろんか
	短母音+促音	なっか	にっか	ぬっか	ねっか	のっか
		らっか	りっか	るっか	れっか	ろっか
語 中	短母音	あな	あに	あぬ	あね	あの
		あら	あり	ある	あれ	あろ
	長母音	あーな	あーに	あーぬ	あーね	あーの
		あーら	あーり	あーる	あーれ	あーろ
	二連母音	あいな	あいに	あいぬ	あいね	あいの
		あいら	あいに	あいる	あいに	あいろ
	撥音+短母音	あんな	あんに	あんぬ	あんね	あんの
		あんら	あんり	あんる	あんれ	あんろ

表2 音環境別誤答率

語頭ナ行音誤答率

	平均
短母音	24.76%
長母音	18.60%
二連母音	14.00%
短母音+撥音	22.52%
短母音+促音	11.47%
平均	18.27%

語頭ラ行音誤答率

	平均
短母音	21.40%
長母音	21.12%
二連母音	18.89%
短母音+撥音	32.31%
短母音+促音	22.94%
平均	23.33%

語中ナ行音誤答率

	平均
短母音	37.90%
長母音	20.14%
二連母音	18.88%
撥音+短母音	14.12%
平均	22.76%

語中ラ行音誤答率

	平均
短母音	11.19%
長母音	9.37%
二連母音	16.08%
撥音+短母音	61.54%
平均	24.55%

t検定で誤答率を比較したところ、有意差は見られなかった ( $t(80) = 1.104, n.s.$ )。この結果から、ナ行音からラ行音、またはラ行音からナ行音という混同傾向はなく、双方向に混同が見られることが明らかになった。

語中位置別誤答率は、語頭が21.63%、語中が23.65%であった。t検定で誤答率を比較したところ、有意差は見られなかった ( $t(80) = 0.631, n.s.$ )。この結果から、語頭と語中のどちらか一方に混同が多いということではなく、両方に同程度の混同が見られることが明らかになった。

母音別の誤答率は、/a/ が22.84%、/i/ が22.07%、/u/ が22.03%、/e/ が24.04%、/o/ が22.07%であった。各母音間で誤答率の平均を分散分析で比較した結果、有意差は見られなかった ( $F(4,77) = 0.056, n.s.$ )。この結果から、ナ行音・ラ行音の混同に後続する母音が影響することはないことが明らかになった。

ナ行音・ラ行音の音環境別（短音・連母音・撥音・長母音・促音）の誤答率（表2）に差があるかどうかを一元配置分散分析によって検討したところ、有意な主効果が見られた ( $F(4,77) = 4.662, p < .01$ )。そこで、どこに有意な差があるのかを検討するために語位置（語頭・語中）、子音（ナ行音・ラ行音）に分けて一元配置分散分析を行ったところ、表3の結果が得られた。この結果から、語頭では有意な差はなく、語中にナ行音・ラ行音ともに有意な差があることがわかった。

表3 語位置、子音別の音環境分析結果

語位置	子音	音環境別一元配置分散分析結果
語頭	ナ行音	$F(4,16) = 1.173, n.s.$
	ラ行音	$F(4,16) = 1.449, n.s.$
語中	ナ行音	$F(3,16) = 8.606, p < .001$
	ラ行音	$F(3,16) = 237.039, p < .001$

語中のナ行音・ラ行音に有意な主効果が見られたため、それぞれ多重比較（Bonferroniの方法）を行ったところ、語中ナ行音では、短母音と二連母音、撥音+短母音、長母音の間に0.1%水準で有意差が見られ、短母音の誤答率が高かった（図1）。また、語中ラ行音では、撥音+短母音と短母音、二連母音、長母音との間に1%水準で有意差が見られ、撥音+短母音の誤答率が高かった（図2）。

以上の分析により、音環境での比較では以下のことが明らかになった。

- ①語頭のナ行音・ラ行音は双方向に混同が見られ、音環境による混同傾向はない。
- ②語中のナ行音は、「短母音」が最も混同が多く、ラ行音に誤聴しやすい。

（例：あな⇒あら）

短母音 > 二連母音、撥音+短母音、長母音

- ③語中のラ行音は、「撥音+短母音」が最も混同が多く、ナ行音に誤聴しやすい。

（例：あんら⇒あんな）

撥音+短母音 > 短母音、二連母音、長母音

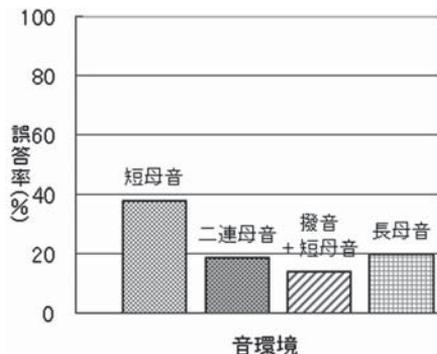


図1 語中ナ行音の音環境別誤答率

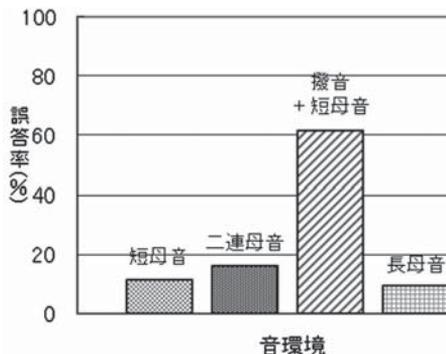


図2 語中ラ行音の音環境別誤答率

①から、後続する音環境が誤聴に与える影響はなく、②と③から、先行する音環境によって混同傾向が出現することが示された。また、本調査で明らかになった②と③に関して、李・村島（2002）の生成調査でも同様の結果が得られているが、生成調査で指摘されている「語中ラ行音で二連母音の時にナ行音になりやすい（例：あいら⇒あいな）」という傾向は本調査では見られなかった。したがって、広東語母語話者のナ行音とラ行音の聴取混同傾向は、先行研究で明らかになっているナ行音とラ行音の生成混同傾向と共通点が見られたが、全く同じ傾向ではないことが明らかになった。さらに興味深いことに、母語においては /n/ が /l/ になることが指摘されているが（麦 2007, 張 2007）、本調査により日本語の聴取において /n/ が /r/ に移行するということではなく、/n/ が消失してしまったわけではないことが示された。

## 4-2 アンケート調査（調査Ⅱ）

### 4-2-1 調査内容および調査方法

この調査は、学習者の発音・聴取に関する意識がナ行音・ラ行音の聴取混同にどのような影響を与えているかを明らかにするためのものである。

アンケートの質問項目は「日本語を話す時、いつも発音を意識しているか」、「日本語の発音で難しい発音があるか、ある場合それはどんな音か」、「日本語の聞き取りで難しい音があるか、ある場合それはどんな音か」である。調査方法は、アンケート用紙を配布し、回答が終わったら回収する一斉調査で、調査協力者は調査Ⅰと同じである。なお、調査協力者が調査Ⅰのナ行音・ラ行音聴取テストにより自分のナ行音・ラ行音の混同に気づいてアンケートに反映させるということを避けるために、調査Ⅱは調査Ⅰの前に実施した。

### 4-2-2 調査結果および考察

「日本語を話すとき、いつも発音を意識しているか」という問いの結果を図3、「発音で難しい音があるか」という問いの結果を図4、「聴取で難しい音があるか」という問いの結果を図5に示す。

また、調査協力者が「発音で難しい音」として挙げたものを図6、「聴取で難しい音」として挙げたものを図7に示す。

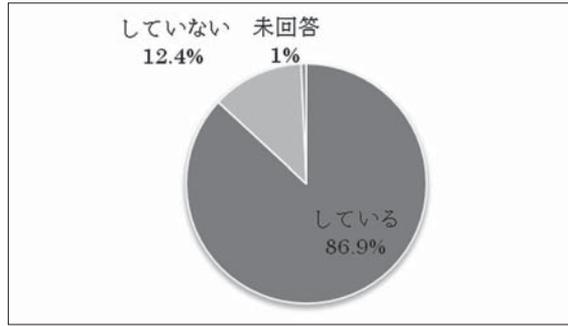


図3 発音に対する意識

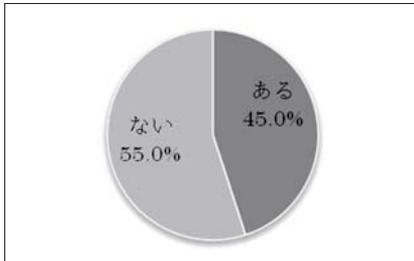


図4 発音で難しい音の有無

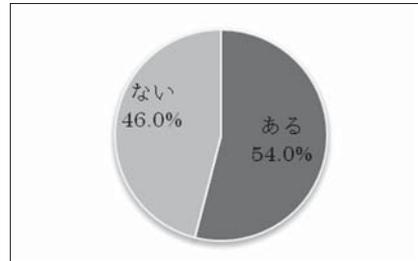


図5 聴取で難しい音の有無

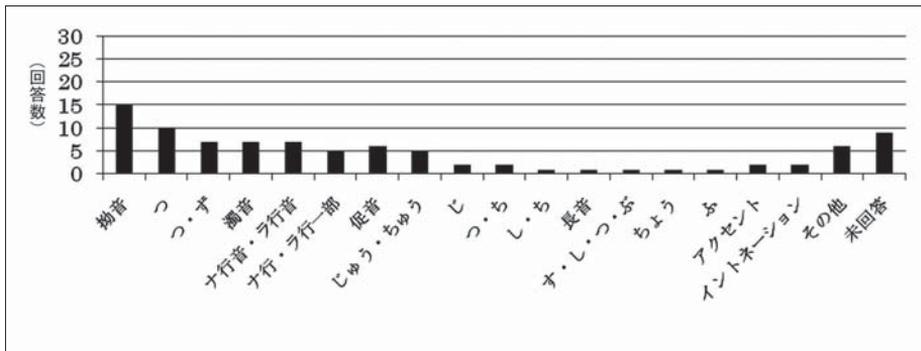


図6 発音で難しい音

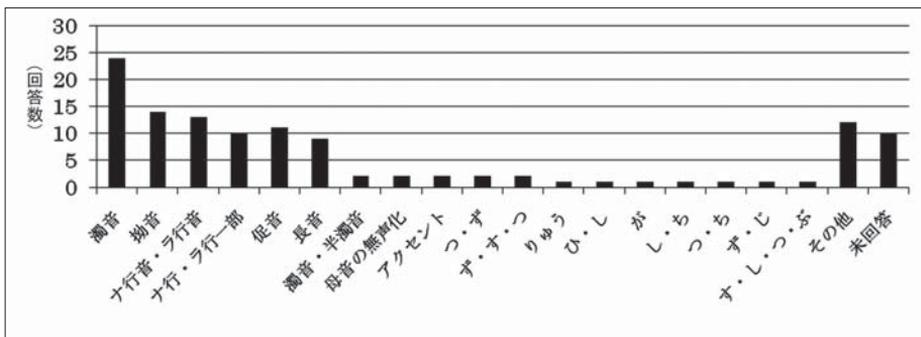


図7 聴取で難しい音

図5の「日本語を話すとき、発音をいつも意識しているか」は、86.9%の学習者が「意識している」と答えており、発音に対して意識が高いことがわかる。

図6と図7比較すると、発音よりも聴取において難しい音があると認識している学習者のほうが多いことがわかる。学習者にとって、発音が難しい音と聞き取りが難しい音は完全に一致しているわけではない。したがって、学習者には「発音はできると思っているが聴取ができない音」や「聴取はできると思っているが、発音ができない音」があると考えられる。

ナ行音・ラ行音の発音が難しいと認識している学習者は、全体の4.86%しかおらず、極めて少ないことがわかった。ナ行音・ラ行音の一部を挙げている場合を含めても8.3%しかない。ナ行音・ラ行音の聴取を「難しい」としている学習者は発音の場合よりも多いが、それでも全体の9.03%に留まり、ナ行音・ラ行音の一部を挙げている場合（例：「ネ」と「レ」）を含めても15.92%であった。この結果から、ナ行音・ラ行音の聴取混同を意識している学習者も少ないことがわかった。さらに、調査Iの成績から上位群、下位群を分けた場合<sup>1</sup>、上位群でナ行音・ラ行音の聴取を「難しい」と回答した学習者は9.38%で、下位群では21.88%であった。上位群でナ行音・ラ行音の聴取を「難しい」とした回答が少なかったのは、上位群では元々ナ行音・ラ行音の混同が少ないためであったと考えられる。一方、下位群においてもナ行音・ラ行音の聴取を「難しい」とした回答が2割程度しかなく、約8割の学習者がナ行音とラ行音を聞き分けられていないにも関わらずその問題点を認識していなかった。したがって、ナ行音とラ行音の聞き分けが困難な学習者のうち、その多くがこの問題点を認識していないことが明らかになった。

## 5. 聴取混同が見られやすい単語の具体例

本調査で得られた結果をもとに、聴取混同が予測されるナ行音、ラ行音を含む単語のミニマル・ペアを作成したものが以下の表である（表4, 5）。教師がこの表に記されている単語を授業で扱う際に、学習者にミニマル・ペアを聞かせどちらに聞こえたか確認を行うことで、学習者自身に問題点を認識させ意識化を促していくことが可能である。また、教師が混同の方向性を知っておくことで、それらの音声を指導する際に練習を増やしたり、間違いやすい音声を重点的に指導したりすることも可能となる。

表4 語頭にナ行音、ラ行音を含む単語のミニマル・ペア

ナ行音	方向性	ラ行音
<u>な</u> いじょう（内情）	⇔	<u>ら</u> いじょう（来場）
<u>ナ</u> イター	⇔	<u>ラ</u> イター
<u>ナ</u> イト	⇔	<u>ラ</u> イト
<u>ナ</u> イフ	⇔	<u>ラ</u> イフ
<u>な</u> く（泣く）	⇔	<u>ら</u> く（楽）
<u>な</u> んとう（南東）	⇔	<u>ら</u> んとう（乱闘）

<u>に</u> く (肉)	↔	<u>り</u> く (陸)
<u>に</u> せい (二世)	↔	<u>り</u> せい (理性)
<u>ね</u> じ	↔	<u>レ</u> ジ
<u>ね</u> っとう (熱湯)	↔	<u>れ</u> っとう (列島)
<u>ね</u> んが (年賀)	↔	<u>れ</u> んが (煉瓦)
<u>ね</u> んしゅう (年収)	↔	<u>れ</u> んしゅう (練習)
<u>ね</u> んしょう (燃焼)	↔	<u>れ</u> んしょう (連勝)
<u>の</u> うどう (能動・農道)	↔	<u>ろ</u> うどう (労働)
<u>の</u> うりよく (能力)	↔	<u>ろ</u> うりよく (労力)
<u>ノ</u> ック	↔	<u>ロ</u> ック

表5 語中にナ行音、ラ行音を含む単語のミニマル・ペア

ナ行音	方向性	ラ行音
<u>あ</u> な (穴)	⇒	<u>あ</u> ら (粗)
<u>あ</u> ね (姉)	⇒	<u>あ</u> れ
<u>い</u> ない (以内)	⇒	<u>い</u> らい (以来)
<u>い</u> ぬ (犬)	⇒	<u>い</u> る (要る)
<u>い</u> のり (祈り)	⇒	<u>い</u> ろり (囲炉裏)
エ <u>ヌ</u> (N)	⇒	エル (L)
<u>お</u> に (鬼)	⇒	<u>お</u> り (檻)
<u>か</u> な (仮名)	⇒	<u>か</u> ら (空・殻)
<u>か</u> に (蟹)	⇒	<u>か</u> り (仮・借り)
<u>か</u> のう (可能)	⇒	<u>か</u> ろう (過労)
<u>き</u> ない (着ない)	⇒	<u>き</u> らい (嫌い)
<u>き</u> ぬ (絹)	⇒	<u>き</u> る (切る)
<u>く</u> に (国)	⇒	<u>く</u> り (栗)
<u>こ</u> のあいだ	⇒	<u>こ</u> ろあいだ (頃合いだ)
し <u>つ</u> ねん (失念)	⇒	し <u>つ</u> れん (失恋)
し <u>ぬ</u> (死ぬ)	⇒	し <u>る</u> (知る)
す <u>ね</u> る (拗ねる)	⇒	す <u>れ</u> る (擦れる)
た <u>か</u> な (高菜)	⇒	た <u>か</u> ら (宝)
た <u>べ</u> なれる (食べ慣れる)	⇒	た <u>べ</u> られる (食べられる)
は <u>な</u> (花・鼻)	⇒	は <u>ら</u> (腹)
は <u>な</u> す (話す)	⇒	は <u>ら</u> す (晴らす)
は <u>ね</u> (羽・羽根)	⇒	は <u>れ</u> (晴れ)
は <u>ね</u> る (跳ねる)	⇒	は <u>れ</u> る (晴れる)

ひの <u>ま</u> る (日の丸)	⇒	ひろ <u>ま</u> る (広まる)
ふに <u>ん</u> (赴任)	⇒	ふり <u>ん</u> (不倫)
ま <u>ね</u> (真似)	⇒	ま <u>れ</u> (稀)
むに <u>に</u> (無二)	⇒	むり <u>に</u> (無理)
む <u>ね</u> (胸・旨)	⇒	む <u>れ</u> (群れ)
げ <u>ん</u> に (現に)	⇐	げ <u>ん</u> り (原理)
さん <u>ね</u> ん (三年)	⇐	さん <u>れ</u> ん (三連)
し <u>ん</u> に <u>ん</u> (信任)	⇐	し <u>ん</u> り <u>ん</u> (森林)
せん <u>ね</u> ん (先年)	⇐	せん <u>れ</u> ん (洗練)
たん <u>ね</u> ん (丹念)	⇐	たん <u>れ</u> ん (鍛練)
ね <u>ん</u> ない (年内)	⇐	ね <u>ん</u> ら <u>い</u> (年来)
こう <u>に</u> ん (公認)	⇔	こう <u>り</u> ん (後輪)
そう <u>な</u> ん (遭難)	⇔	そう <u>ら</u> ん (騒乱)
ぞう <u>に</u> (雑煮)	⇔	ぞう <u>り</u> (草履)
だ <u>い</u> に (第二)	⇔	だ <u>い</u> り (代理)
は <u>い</u> ね <u>つ</u> (排熱)	⇔	は <u>い</u> れ <u>つ</u> (配列)

次の表(表6)は語中ラ行音の「撥音+短母音」の音環境になっている単語リストである。有意味語のミニマル・ペアは存在しないが、混同傾向が強く見られるものである。これらの単語を授業で取り上げる際に、無意味語のミニマル・ペアを同時に提示することで指導を行うことができる。例えば、「オンライン」(有意味語)と「オンナイン」(無意味語)の両方を聞かせ、どちらが「オンライン」かを選ばせて、ナ行音、ラ行音の弁別能力を高めていく方法が有効であると考えられる。

表6 混同傾向が強い(ラ行音⇒ナ行音)単語リスト

ラ行音⇒ナ行音の混同傾向が強い語(撥音+ラ行音)		
オン <u>ラ</u> イン	が <u>ん</u> ら <u>い</u> (元来)	か <u>ん</u> ら <u>ん</u> (観覧)
か <u>ん</u> り (管理)	か <u>ん</u> れ <u>い</u> (慣例)	か <u>ん</u> れ <u>き</u> (還暦)
か <u>ん</u> れ <u>ん</u> (関連)	か <u>ん</u> ろ <u>く</u> (貫禄)	き <u>ん</u> り <u>ん</u> (近隣)
く <u>ん</u> り <u>ん</u> (君臨)	く <u>ん</u> れ <u>ん</u> (訓練)	け <u>ん</u> ら <u>ん</u> (絢爛)
け <u>ん</u> り (権利)	け <u>ん</u> り <u>つ</u> (県立)	げ <u>ん</u> ろ <u>ん</u> (言論)
こ <u>ん</u> ら <u>ん</u> (混乱)	こ <u>ん</u> り <u>ん</u> ざ <u>い</u> (金輪際)	こ <u>ん</u> れ <u>い</u> (婚礼)
さ <u>ん</u> り <u>ん</u> (山林)	し <u>ん</u> ら <u>い</u> (信頼)	し <u>ん</u> ら <u>つ</u> (辛辣)
し <u>ん</u> り (心理・真理)	し <u>ん</u> る <u>い</u> (親類)	じ <u>ん</u> る <u>い</u> (人類)
し <u>ん</u> ろ (進路・針路)	し <u>ん</u> ろ <u>う</u> (心労・新郎)	ぜ <u>ん</u> れ <u>い</u> (前例)
せ <u>ん</u> ろ (線路)	た <u>ん</u> ら <u>く</u> て <u>き</u> (短絡的)	だ <u>ん</u> ら <u>く</u> (段落)

だんろ (暖炉)	ちんれつ (陳列)	でんらい (伝来)
てんらく (転落)	てんらんかい (展覧会)	ねんりん (年輪)
ねんれい (年齢)	はんらん (反乱・氾濫)	ぶんり (分離)
ぶんるい (分類)	ぶんれつ (分裂)	べんり (便利)
べんろん (弁論)	ほんらい (本来)	ほんろう (翻弄)
ほんろん (本論)	らんりつ (乱立)	りんり (倫理)
れんらく (連絡)	ろんり (論理)	

その他にも、調査Ⅱの結果から、「ナ行音、ラ行音が連続した音の入っている単語が難しい」という学習者のコメントが複数見られた。そこで、「～なければならぬ」のような文法項目、「うらない (占い・売らない)」や「つまらない」、「わからない」などの言葉を導入する際に、聴取練習を積極的に行うことが重要であると考えられる。例えば、「わからない」、「わからぬ」、「わかぬ」という音声を聞かせ、違いを認識させる指導も有効であると考えられる。

以上のように、音声指導にまともな時間を使えない場合でも、新しい単語などの導入時に少しずつ聴取指導を行うことは可能であり、継続した指導により混同の改善を促すことが期待される。また、先述の単語リストを使用したタスク活動を積極的に取り入れることによって、学習者のナ行音とラ行音の聴取に対する意識を高めることができる。ミニマル・ペアの単語を使用したコミュニケーションタスクなどの教室活動で、ナ行音とラ行音を正しく聴取しなければコミュニケーションに支障をきたすことを学習者が体験し、聴取における自己モニターを促すことが可能となる。

## 6. まとめと今後の課題

本研究では、広東語母語話者のナ行音とラ行音の聴取混同傾向を明らかにするために聴取調査を行った。その結果、子音別、語位置別、後続母音による混同傾向はなく、ナ行音からラ行音、ラ行音からナ行音と双方向に混同することがわかった。また音環境別では、後続する音環境が混同に与える影響はなく、先行する音環境によって混同傾向が出現することが明らかになった。また、先行研究の生成調査との比較から、生成と聴取との共通点と相違点が明らかになった。

次に、発音・聴取に関する意識がナ行音とラ行音の聴取混同にどのような影響を与えているのかを調べるために、アンケート調査を行った。その結果、調査対象の学習者の多くが、日本語を話しているときに自分の発音を意識していることが明らかになった。一方、ナ行音とラ行音の聴取混同に対する意識がある学習者は非常に少なく、自分にナ行音とラ行音の聴取混同があるにもかかわらず自分の混同に気づいていない学習者が多くいることがわかった。したがって、学習者が発音に対する意識を高く持ち、自分の発音を常に意識していても、ただ全体的に意識を払っているだけでは、自分の音声上の問題点には気づきにくいと言える。

以上のことを踏まえ、教育現場ではまず、ナ行音とラ行音の混同を持つ広東語母語話者に、自分の問題に対する意識化を促す必要がある。学習者の意識において、発音における難しさと聴取における難しさが異なっており、聴取はできるが発音ができない場合と発音できるが聴取ができない場合がある。そこで、問題が発音にあるのか聴取にあるのかを、学習者にしっかり認識させる必要がある。ただ単に、教師が教室でモデル発音を提示し、学習者にリピートさせるだけでは、聴取に対する意識化は見込めない。ナ行音とラ行音の混同に対する指導は、発音指導だけでなく、混同に焦点を当てた聴取指導が必要である。また、正しく聴取できるかどうかは、発音にも大きく影響する。学習者がいくら発音練習を行っても、正しい聴取なくして自分の発音を自己評価することができない。このことから聴取混同改善が必要であり、教師による積極的な聴取指導が求められると言えるだろう。さらに、教師が広東語母語話者のナ行音とラ行音の聴取混同傾向の知識を得ることで、効果的な聴取指導の実践が期待される。

また、教師からの聴取指導だけではなく、学習者自身が自分モニター能力を高めメタ認知を働かせて、日本語 /n/ と /r/ の音韻カテゴリーを形成していかなければならない。まずは学習者が、日本語の /n/ と /r/ を聴取する際に二つの音の違いは何かを意識して聴取し、気づきを得ていくことが必要である。特に、学習者が教室外においても自律学習に取り組んでいくことが重要である。例えば、日本語学習関連のインターネットサイトの利用も学習方法の一つになり得る。インターネット上でひらがな学習サイトなどが複数あるが、これらを利用してナ行音とラ行音を聴取し、何度でも聞き比べることが可能である。このような方法であれば、日本語学習者が容易に日本語音の聴取を行うことができ、時間や場所を選ばず自律学習が可能となる。学習者が教室外の様々な /n/ と /r/ に意識的に触れることによって、音韻カテゴリーの形成が促される。これらの方法を教師が提供・提示し、学習者の学びを促していくことが重要であると考えられる。

今後の課題は、広東語以外の中国方言におけるナ行音とラ行音の聴取混同を明らかにすることである。中国方言の中には、/n/ と /l/ の弁別がない方言が複数あり、/l/ が /n/ になるという広東語とは逆の方向性も存在するため、混同傾向が異なる可能性がある。今後、このような方言差を考慮した指導法が必要である。さらに、ナ行音とラ行音の習得に関与する個人要因、社会的要因を調査し、習得のプロセスを明らかにすることによって、具体的な指導法の提言を目指したい。

## 注

- 1 本研究では、調査 I (ナ行音・ラ行音聴取テスト) の誤答率 10% 以内 (誤答数 8 個以下) を上位群とし、誤答率 35% 以上 (誤答数 29 個以上) を下位群とした。なお、上位群・下位群に該当する学習者数は共に 32 名である。

## 参考文献

天沼寧・大坪一夫・水谷修 (1982) 『日本語音声学』くろしお出版、74-76

- 戸田貴子 (2008) 「大人になってからでも発音の習得は可能か」『日本語教育と音声』くろしお出版, 43-59
- 野沢素子 (1980) 「広東語話者の日本語学習における音声の問題点について—子音を中心にして—」『日本語教育』41、13-24
- 李活雄・村島健一郎 (2002) 「借用語に見られる音声混同—香港広東語話者の日本語 n-/l- の混同から—」『音声研究』6、98-104
- (2003) 「香港広東語話者のナ行とラ行発音の習得と広東語における n-/l- 混同の一考察」『日本学刊』7、7-17
- 張洪年 (2007) 『香港粵語語法的研究 (増訂版)』香港中文大學
- 麦耘 (2007) 「現代广州话两对响音声母的演变」『第十届国际粤方言研讨会论文集』中国社会科学出版, 11-16
- Ho, Mui Tai. 2004. *A Sociolinguistic Investigation of Cantonese in Hong Kong and Guangzhou*, PhD dissertation: University of Essex.
- Hung, Tony T.N. 2000. Towards a Phonology of Hong Kong English: *World Englishes*, 19-3, 337-356
- Lai, Yuk Wai. 2001. A Phonology Analysis of a Cantonese-based Accent in Japanese: 日本学刊, 5, 15-19
- Tung P, R. Lam, W.K. Tsang. 1997. English as a medium of instruction in post-1997 Hong Kong: What students, teachers, and parents think: *Journal of Pragmatics*, 28-4, 441-459